

静かな勇士 小池文英先生

坂 口 亮

小池先生の左耳下部にできた腫瘍がわずか1年の経過で先生の命を奪ってしまった。初めはそう目立たぬ腫瘍で、時に刺すような痛みもあった由、諸検査を経て昨年8月半ば摘出術を受けられた。診断は扁平上皮癌と仄聞した。説明はどのようにされたか、御本人は化学療法も受けていると淡々と語られた。当時先生は全くお元気で、我々の心配を尻目に、退院早々10月初めオランダのリハ会議に出席して役を果たされた。またその頃、我がセンターでは、政府の人勧凍結を不満とする組合（半官半民の当センターは、実際的には政府の動きに縛られる）の要求で、何回も団交が繰返されたが、先生はその都度出しにくい声をふりしぼって対応された。（8月の手術は徹底第一で、そのため反回神経が犠牲になった。以後発声の御苦労は想像に余りある）ある職場では児童収容数をめぐっていざこざがあった。先生はその話し合いに夜遅くまで力を尽され、疲労困憊その極と思われたがいつもの笑顔で訥々しかし克明に結着の模様を私達に説明された。

11月局所再発、左耳下部に赤黒い光沢のある小腫瘍が二、三盛り上って来た。12月早々放射線科に入院して強力な抗癌治療を受けられ、その効顯著で腫瘍は縮小消失した。しかし体力の消耗もまた相当であった。越年して1月下旬退院、休むことなく再び多忙の所長業務に就か

れた。数週うちに腰痛発症、次第に激しさを増した。団交や部長会議には苦痛をおしかくして出られたが、終には周囲のもののすすめる簡易ベッドの搬入を拒まず、身を横たえて指揮された。これも限界で、4月1日とりあえず東大整形外科に入院、腰痛は放射線照射などによって軽くなったものの、既に癌細胞は先生の全身を蝕んでいたようで、急速に全身状態も悪化し、内科に移って一時小康を得られたが、もはや挽回不可能で7月24日早朝永眠された。仕事第一に、前後3回の入院で刀折れ矢尽き果てた結末であった。

最後の3日間レスピレーターで管理されたが、その直前までは意識は確かで、お見舞に何うたびに、センターの現況報告に耳傾け、意見を述べられた。お言葉が聞きとりにくく、応答がつらいので私はつい逃げ腰になったが、先生は仕事の話を喜ばれ、待たれた。病気に関する不安や疑問は口にされなかったが、我々の困惑をおもんばかってのことと察せられる。

先生は安手の燃え上りをされず、スタンドプレーを特に嫌われた。私はこの15年余りお近くで働くことができ、特に御病気の最後の一年は先生の真髓をみる思いで深く心に刻みつけられている。

（心身障害児総合医療療育センター、副所長）